

ちらのひとつだったはずですけど、その他者との関係が、おそらくこれが実際から、行き交う人たちはその人なり、自分の領域をの動きも見学会の時ほど意図うちにそれぞれの属性を状態はかなり豊かではないとしてみると、「関係ない」とおそらくそんな距離感だつたらちよつとドライなように、接点を持たないわけではなくて、他者は他者として認められる。少し超越的な見方だと思わんですが、その他者との関係は、実際の世界、例えば経済格差とか宗教的な対立とか民族紛争とか、そういうグローバルイズムの世界において、倫理的なあり方のような気がするんで、**【註2】**。遍在的と言ったらいのか、例えば古典建築の「ドーム」がある種の世界を表していたというような意味で、T.T.T.にも現代的な世界像を見ることができないのではないかと、それは単に上空飛行的な目線で建築をモデル化して現実世界と重ね合わせる、ということではなくて、実

### ■お詫びと訂正

前号の坂本一成氏へのインタビュー記事（本誌ホームページにて公開）に誤りがありました。正しくは記事の2ページ目に下記の【註2】が入り、以降、註の番号がひとつずつ後ろにずれます。読者および関係各位へのご迷惑をお詫びし、ここに訂正いたします。

【註2】この建築に政治性を見るならば、それは「世界は複数の観点が存在するときに限り出現する」（『政治の約束』ジェローム・コーン編、高橋勇夫訳、筑摩書房、p.206）と述べた政治哲学者、ハンナ・アーレント（1906-75）の思想に通じるところが多い。ユダヤ人としてナチス・ドイツを経験したアーレントは、20世紀に起きた全体主義を主な研究テーマにしており、そこで彼女は、共同体が単一の観점에서事物を捉えることの危うさを指摘しつつ、人間個人の活動を信頼して、その自由な活動を支える基盤となる「世界」のあり方を重要視した。この態度は坂本の設計の主題である「社会や文化のさまざまな制約の内にかに自由な活動と精神を確保できる場を提出できるか」（『都市に立つ形なき外形、そして都市の日常への連続と広がり』『新建築』2006年3月号）ということと本質的に同じであり、註1で述べたような、「対象としての建築」の物質性ではなく「環境としての建築」「関係としての建築」の空間性を志向する点とも明快な類似を見出せる。

また、坂本がそこで言う「自由」が、現実から乖離した建築表現としての「自由」ではなく、表現としてはある種の歴史的・文化的な蓄積を引き受けているように、アーレントが言う「世界」も、人間によってつくられ、一個人の生に対して相対的な耐久性を持つ具体物が構成する「人工的世界」である。それは日常性のなかで個人の存在をより大きな秩序に位置づけるものにほかならない。「つまり共通世界は、私たちがやってくる前からすでに存在し、私たちの短い一生の後も存続するものである。それは、私たちが、現と一緒に住んでいる人びとと共有しているだけでなく、以前にそこにいた人びとや私たちの後にやってくる人びとも共有しているものである」（『人間の条件』志水速雄訳、ちくま学芸文庫、p.82）。建築はこうした「世界」を構成する要素のひとつと言えるだろうが、とりわけ坂本の建築は、その性質を強く帯びているように思える。

